

[要旨]

象りと共鳴

——チャールズ・テイラーと言語の神秘——

坪光 生雄

本論文では、チャールズ・テイラーの言語論が、彼の宗教論との関わりにおいてどのような重要性をもつものであるかを明らかにする。テイラーの思想は複数の話題領域に接する多面的なものであるが、初期の著述から2016年の『言語動物』に至るまで、彼は一貫して「言語」の問題に哲学的に取り組んできた。言語への問いは彼の思想にとって中核的なものである。他方、テイラーは2007年の『世俗の時代』の刊行を契機として、宗教に関する理論家としても注目を集めるようになっている。自身カトリックの信仰者でもあるテイラーの哲学・思想の背景に、ある種の宗教的動機が控えていることはつとに指摘される場所である。本論文は、こうしたテイラーの思想の重要な二側面を、相互に整合的な仕方で結びつける観点を提示する。『言語動物』とそれ以前の著作に取り組むことで、テイラーの表現的-構成的な言語観が、彼の宗教論にとって重要な論点を多数含んでいることが明らかになる。言語の創造性は私たちの受肉した身体性の経験と切り離すことができず、またそのパフォーマンス力は儀礼的な共同性の創出、「コミュニオン」への展望へと結び付けられる。テイラーにとり、言語は多くの意味で神秘的なものである。